

疑問から論理へ... 個の追究意欲が生み出す集団思考 どんぐりと戦争をとおして

神奈川県平塚市立崇善小学校
こせむらさとし

小瀬村聡

【実践の概要】

「どんぐりと戦争」と題するこの単元は、15年戦争の最中、国民学校生徒に軍需物資の補完を目的として呼びかけられたどんぐり拾いを題材に取り上げた6年生歴史教材である。小国民諸君（原文ママ）と題したチラシによって、全国の少国民が戦争の勝利を信じて、どんぐりを供出した事実から、15年戦争の時代の子もたちの姿と戦争の実際を追究していく問題解決学習である。

どんぐりの用途や戦争の実態、国民学校とは何か、といった疑問を、祖父母に対する聞き取り調査や文献資料などで、徐々に解明していく学習を構想した。さらに、追究過程で新たに生じた疑問については、調べたことをもとにして問題解決の話し合いを継続していった。少国民の目から戦争をとらえようと、現代の子もがチャレンジした学習であった。どんぐりは、県の森林組合を通じて全国各地から集荷され、アルコールやタンニンの原料、家畜の飼料として全国に寄付された。

【論文内容の紹介】

1 主題設定の理由

戦争に勝つためにどんぐりを拾わせた事実に向き合ったときに、子どもたちが自ら問いを持ち、追究するなかで、学びの視野を広げていくと考えた。戦争を子どもの視点からとらえて、自ら追究する個を育てたいと考えた。

2 研究仮説

・問題追究の過程で、戦時中国民学校に通った人々に取材する活動が生まれてくる。

・戦時中の国民生活のレベルから戦争について考え、問題解決学習ができる。

3 研究内容および方法

・子ども自身が学習問題を成立させる。
・座席表や理解カルテを活用し、子どもの理解を基盤において時案を考えた。

4 研究の実際

子どもたちが初めに抱いた疑問は、どんぐりの使い道に関する疑問、「国民学校とはなにか。」「この大きな戦争（15年戦争）とはどんな戦争か。」「大東亜とは。」といったものであった。学習問題を解決するために、子どもたちは意欲的に取材や調べ学習を始めた。

子どもたちの祖父母の中に、実際にどんぐり拾いをされた7人の経験者がいることが分かり、取材して調べたことや話し合いから、国民学校の特異な性格についても迫ることができた。

どんぐり拾いの謎を解きあかす形で始まった子どもたちの追究は、多くの子どもたちが家族や遠くの祖父母も含めて、戦争について語り合うという副産物を生んだ。

この学習の核となった学習問題は、「どんぐりは本当に役に立ったのか。」「どんぐりを拾って戦争に勝てると思っていたのか。」ということであった。話し合いの過程で、どんぐりを有効利用することよりも、子どもたちの心を戦争に協力する気持ちに向かわせるためだったのではないかと考え始めた。

5 研究の成果と課題

・庶民、とりわけ子どもの視点から歴史学習をすることができた。
・子どもはもちろん、保護者までも巻き込んで問題追究がなされた。
・話し合いのなかで、戦争についての論理を子どもたち自身が生み出していった。
・問題解決の必要感に駆られて知識理解を吸収していったが、個人差が生じた。
・話し合いの技術は育ったが、まだまだ不十分な点もあった。